

日本史授業構成の一視点

－「東アジア交流史における海の役割」を例として－

大江 和彦

学習指導要領の改変に伴う授業時間数減少の中で、教材の内容精選を効果的・合理的に行うことは、地歴科だけではなく、どの教科においても課題であるといえる。この課題を克服するためには、新たな視点からの教材開発が必要と考える。現代社会に生き、未来を創造してゆく生徒に、画一的でない、柔軟性のある思考を可能にさせる授業づくりを課題とし、日本歴史の既成的時代区分の批判的吟味を通じて、日本史A前近代史における主題的学習の分野に絞り、海の時代的役割からみた東アジア交流史の教材構成案を、1つの視点として提示したい。

I. 日本の歴史と「交流」

日本は、世界で唯一「元号」をもつ国家であり、この「元号」は、古代以来の中華思想の名残である。この例からもわかるように、原始以来、さまざまな知識・情報・貿易品などを大陸から得てきた。日本の歴史を鑑みるに、東アジアの中の日本であり続け、思想的にも物理的にも実に長い期間にわたりその恩恵にあずかってきたといえる。しかし、近代以来の悲惨な戦争の歴史は、戦後日本の反省的發展に大きな意味を持っている。

歴史学習の意味を、過去の歴史に現在の自分や社会を照らしあわせ、これからのよりよい社会を創造する、と考えるならば、過去約100年の歴史に、私たちは何を学んできたのだろうか。交流の原点に立ち返り、海を、「人と人を隔てるもの」ではなく、「人と人を結びつけるもの」として積極的に解釈することを通じて、「外交史」ではない「交流史」の新しい時代区分を定義する。

II. 東アジア史と日本

九州南部と東北地方は、7世紀頃の蝦夷・隼人の服属、8世紀の出羽国・大隅国の設置、その後の蝦夷征討などにみられるように、「化外の民」として政治的・軍事的征服の対象とされた。つまり、これらの地域は、国家支配の範囲外であったといえると同時に、それらを除いた地域が「国家」であったと言い換えることができる。江戸時代、「無主の地」として扱われていた蝦夷地（北海道）の大部分は、田沼時代において探検・調査の対象となっている。私たちが現在一般的常識としている「日本」という国家の範囲とは異なるものであった。

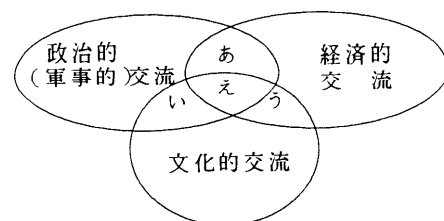
以上のような、日本という国の境界がどこまでであったのかという問題は、それぞれの時代で「国家」と認識

されていた地域（職業や地域によって違いはあるが）に生きた人間と、その周辺部に生きた人間（これを「境界人」と呼ぶ）、そしてさらにその外（いわゆる外国）から周辺部の地域や「日本」を見た人間が、一方的または相互的にどのような交流を行ったのか、いわゆる東アジア史の中の日本を考察していきたい。

1) 国家間交流の視点

日本の歴史上、為政者や民衆が「国家」を意識する場面は、何度もあった。外国へ、または外国からの遣使や侵略などを通じて、容姿・言語・習慣などの違う人間や、見たこともないモノと接する度に、「異なる国の人・モノ」という意識が生じ、そのたびに自身自身や自分の住む国を意識したはずである。

まずは、国家意識を規定する交流が、目的と方法に大きく規定される、という視点から、次の表のように、東アジア史における具体的交流を分類する。すなわち、日本または諸外国が、意図的・主体的におこなった政治的交流と経済的交流、日本または諸外国が、意図的であるとないに関わらず行われた、文化的交流の2つである。



ここでは、図中のあ～えに限り、複数の目的や結果をもつ交流を中心に分類する。なぜならば、教材として選択する場合、1つの事象を分析・検証する事を通じて、複眼的視点から時代の特徴をとらえることができると考えるからである。(かっこ内は世紀)

あ. 政治的・経済的交流

白村江の戦い(7), 新羅使・遣新羅使(7~9), 渤海使・遣渤海使(8~10), 日宋貿易(12), 元寇(13) 日元貿易(14), 前期倭寇(13~14), 後期倭寇(15~16) 外国船の来航と通商要求(18~19), ペリーの来航と開国, 和親・通商条約の締結(19)

い. 政治的・文化的交流

「倭」・「奴」・「邪馬台国」の外交(紀元前後~6), 仏教・儒教伝来(5~6), 遣隋使(7), 遣唐使(7~9), 鮮通信使(17~19)

う. 経済的・文化的交流

建長寺船・天竜寺船派遣(14), 南蛮貿易(16~17), 朱印船貿易(17)

え. 政治的・経済的・文化的交流

日明(勘合)貿易(15), 文明開化(19), 条約改正交渉(19~20), 日清戦争(19), 日露戦争(20), 韓国併合(20), 第一次世界大戦と国際協調時代の外交(20), 満州事変から戦時体制への移行(20), 第二次世界大戦(20)

2) 教材としての有効性

上のような分類を通じてわかることは、政治・経済・文化ともに同時に関連するできごとが数多く見出されるということである。なぜ各々の交流が起こったのか、を考えれば、当時の東アジア諸国家の動向を背景として、為政者や民衆が置かれていた状況や各々の国家意識が、交流の要因となっていることがわかるはずである。

倭寇は、13世紀から16世紀まで、前期倭寇は北九州や瀬戸内海に住む島民や農民、後期倭寇は朝鮮人や中国人が、海を舞台として貿易・海賊行為を行ったことをさす。公家が動揺し、守護が倭寇禁圧に努力した事実は、交易を行いたい民衆と、それを抑えたい為政者の国家意識に、かなりの相違があるといえる。つまり、倭寇の例に限らず、1つの交流がなぜ起こったのか、を考えるには、為政者が、国家間の交流をどう考えていたのか、民衆は何を求めて海へ出ていったのか、民衆には国家という意識がどれほどあったのか、などの考察が必要となる。教材構成の際、交流に対する為政者の立場からの見方と、民衆の立場からの見方の2つの軸を設定し、それぞれの違いを明らかにすることで、

東アジア史をより深く理解できると考える。

III. 「交流」の教材化

東アジア史を教材化する際、次の4つの視点を中心に交流の内容と意義を考察する。

- a) 誰によって交流が起こったのか
- b) なぜ交流が起こったのか
- c) どのように交流があったか
- d) その結果双方の社会にどのような影響があったか

1) 8世紀までの交流

原始時代から古代はじめにかけての交流は、大陸と陸続きであった旧石器時代にさかのぼり、縄文時代晩期から弥生時代はじめの稲作や金属器の伝来や、5世紀の大陸文化の伝来などが代表的なものとしてあげられる。しかし、国家意識をテーマとした本研究の場合、まず、日本にクニが出現する紀元前後から6世紀にかけての中国王朝への遣使を分析の対象とする。日本国内の統一国家形成の過程であり、中国王朝による倭国の冊封体制への編入である。

「漢書」地理志にみられる倭人の楽浪郡への遣使、「後漢書」東夷伝にみられる奴国王の遣使と印綬の授受、倭国王帥升の生口献上、「魏志」倭人伝にみられる邪馬台国女王卑弥呼の遣使と親魏倭王の称号の授受、「宋書」倭国伝にみられる、倭王武による中国南宋への遣使などである。5・6世紀には、朝鮮半島からの渡来人は大和政権において、韓鍛冶部・陶部・錦織部・鞍作部などと呼ばれる技術者集団に組織され、各種産業の発展に貢献した。漢字や儒教・仏教の伝来にも国王の意志が強く反映されたと考えられる。

また、7世紀から8世紀にかけて盛んに行われた遣隋使・遣唐使は、大化改新や、律令国家形成など、政治・文化の発展に大きく寄与している。遣隋使に関しては、日本側の国書の内容に対して隋の煬帝が怒ったとされている。中国からみて東の位置にある日本は、日の沈む西の方角にある隋に対し、日の昇る方角にある国(ひのもと=日本)であった。そして、天子という自称を変更し、中国の「皇帝」に対し、「天皇」と自称するようになるのである。「日本」の国号と「天皇」の称号のはじまりである。遣唐使については、630年の第1回派遣から、唐の国力の衰退を理由として、中止が奏上されたの9世紀終わりまでの間で、最も盛んに派遣が行われたのは、8世紀が中心であった。

すなわち、紀元前後から8世紀までの間の交流は、

国王(a)が、
中国王朝との交流を通じ、権威・制度をより確固たるものにするため(b)に、
使者を通じて海を渡って交流を行い(c)、
その結果、さまざまな文物が日本に流入した(d)。

と解釈できる。

もちろん、民間の交流もあったが、この時期の国王中心の交流が、諸産業における先進的技術・漢字・儒教・仏教・律令制度を日本にもたらし、当時の、そしてそれ以後の日本のあり方に大きく関与している。特に、この交流の中で日本が大きく影響を受けた、律令政府を中心とする「華夷思想」は、地方や蝦夷などに対する差別とそれらの地域に対する高圧的姿勢となり、天皇を中心とする同心円の清浄空間を作り上げていったといえる。

よって、このような交流が行われた時期を、「国王通交の時代」と定義する。

2) 9世紀から16世紀までの交流

i) 9世紀から12世紀までの交流

9世紀に入り、律令国家の衰退に伴う地方の蠢動と武士の発生、唐の衰退と宋の成立、新羅の衰退と高麗の成立、渤海の衰退と契丹の成立という東アジア世界の変化を背景として、交流の主体が王から民間の人間に移るようになる。

その例は、9世紀に、新羅の商人が太宰府にやってきて商売をしているというものである。次は、日本の朝廷が発布した831年の官符(資料②-1)である。

つまり、ここにある為政者の意識は、外国人が日本にやってくることには異議を唱えないが、国民=愚かな存在、民衆と渡来外国人の間に介入していこうという考え方である。一方で、その役人が争って渡来の品々を買い求めるという現状もあった。公的な役人としての貴族の顔は、裏を返すと、外来の品をほしがるといって、民衆の顔になる。つまり、民衆の欲求と同じなのである。

また、天台宗の僧円仁は、838年、仏教を学ぶために遣唐使に同行して唐へ渡り、839年、新羅の商人船に乗せてもらって帰国したという記録がある(資料②-1)。このことは、日本と唐の間には公的な交流である遣唐使があり、新羅と唐の間には私的な商業ルートが存在し、さらに、新羅の商人は、日本へのルートを熟知していたことを示している。東アジアの海を舞台に活動する商人が、商業目的から、日本・朝鮮半島・中国の3国の国境を越えて活発に往来する時代にな

ったのである。

この傾向は、10世紀の宋の成立以降さらに顕著になり、11世紀に、契丹(遼)から帰国した宋の蘇轍による、宋朝への報告(資料②-2)にみられるように、経済的交流が国家の規制を越えてさらに活発に行われた例である。

さらに、宋銭が日本に大量に流入していた例として、1193年、朝廷から出された官符(資料②-2)をみると、日宋貿易は、律令に基づいた日本人の渡航禁止と、10世紀初めに定められた来航制限のもとで、宋の商船が寧波などから太宰府に到着し、日本との貿易を行ったものである。宋の商人が来航すると、朝廷は唐物使を派遣して優先的に貿易を行い、残りを民間の貿易にゆだねた。荘園領主の勢力増大に伴って貿易は活発化し、12世紀の南宋期にはいると、日本商人の渡航も多くなり、平氏による貿易振興策により活発化し、宋銭をはじめとして、新安沈船や博多の泥炭層から発見された陶磁器などを例として、日本の経済や文化に大きな影響を与えた。また、為政者は、このような交流を行った地域を、中国はもちろん、中国と正式な交流の途絶えた日本の為政者もまた、天皇を中心とする自国意識を強めていったため、「自国の辺境にある地域」と考えている。一方、日本・高麗・宋のそれぞれの国家の地理的境界に生きる民衆には、国家意識は薄かったのではなかろうか。

9世紀から12世紀までは、国家間交流が主である国王通交の時代が終わり、わずかな僧侶や中国船渡来のみであったところに、中国船の来航に応じて、九州地方の荘園領主などが積極的に宋商人と交易を行おうとする時期に当たる。上の報告と官符は、日本と宋の朝廷が、銭貨(宋銭と考えられる)の流出や流通を止めようとして止められないようすがうかがえる。確かに、平氏政権などによる貿易振興策もあったが、民間の交易に為政者が加わったとみることができる。すなわち、12世紀までの日宋貿易に代表される交流は、

地理的境界に生きる民衆(a)が、
相互に貿易を通じた経済的価値を求めて(b)
自ら海を通じて商品流通を行い(c)、
相互の国家の政治・経済に大きな影響を与えた(d)

と解釈できる。

ii) 13世紀から16世紀までの交流

13世紀から16世紀にかけての交流としては、元寇・倭寇・勘合貿易・ヨーロッパ人の渡来などがあげられる。元寇は、元が、高麗征服後、高麗軍を加えた大軍

で、1274年と1281年の2度、九州北部に派兵をして失敗に終わったできごとである。この戦いは、国内的には、北条得宗家への権力集中が進み、御家人体制の崩壊・鎌倉幕府倒壊の契機となった。同時に、日本は神が擁護する国という神国思想が広まり、以後の日本人の対外意識を大きく規定する戦いでもあった。

勘合貿易は、衰退する高麗・元と、南北朝の動乱という歴史的背景の中で盛んになった倭寇の禁圧を要求した李氏朝鮮・明の動きに対応して起こった、日本から送られる遣明船を中心とする貿易である。日本国王に任じられた足利義満が朝貢という形式で貿易を行い、貿易の実利をとると同時に、天皇の王権篡奪を、中国から日本の実質的な王として認められることで実現しようとしたともいわれる。いずれにしても、勘合貿易が、各国国王の意志によって行われたかどうかを考察する前に、東アジア世界の動きと、勘合貿易成立の背景にあった倭寇の歴史的意義を考察する必要がある。

倭寇は、前出のように、前期倭寇・後期倭寇に分けられ、生産手段が限られている地域に住む民衆の経済的欲求が軍事行動にまで発展した例であり、13世紀から16世紀までの4世紀もの間、海を通じて、東アジア世界を縦横無尽に駆け回った武装商人団である。また、「ばはん船」と呼ばれ、八幡大菩薩の旗をかかげていた。また、後期倭寇は、中国南部や南海地方にまで出没し、明衰亡の一因にもなったといわれる。なぜ、彼らは、一国の衰亡に大きな影響を与えうるほどの、統率された大きな集団に発展したのだろうか。このことは、当時の日本側・高麗側・明側の社会的混乱が大きな要因であると考えられる。

しかし、「明月記」に、「末世ノ狂乱至極ニシテ、滅亡ノ源カ、奇怪ナル事ナリ…」とあるように、公家階級が嘆き動揺していることや、今川了俊や大内氏の軍が高麗にわたり、倭寇禁圧に努力した例が史料に残っていることから、為政者と民衆の国家意識の違いがあることがわかる。つまり、倭寇は、農民であり、ある時は商人であり、ある時は容赦なく襲撃を行う残忍な戦闘集団でもある。勘合貿易は、このような倭寇の動きが、為政者の主体的交流を成立させたといえる。

また、鎌倉時代の勸進上人は、13世紀以降、商業や流通・交通に関与して冒険的資本家として活躍した禅宗や律宗の僧侶であり、支配者の許可を得て重要な津や泊に関所をたて、そこを通る船から津料などの名目で関所料を取り立てる。これは、交通と市場の成立と発達を背景として、たくさんの人や船の通る場所、つまり港や宿に関所を設け、通行税をとるといったかたちで寄付金、つまり資本を蓄積したのである。特に14世

紀以降は、「唐船」という大型構造船を建造し、大陸に行って貿易を行い、さらに資本を増殖させている。そのために、船大工・鍛冶を組織して船を建造し、水手を雇い、航海と交易を専門の船頭や綱司や綱主（日本人も宋人も多い）に請け負わせる。帰国後は、番匠・鍛冶・壁塗り・檜皮師・鋳物師・石工などを雇って大土木工事を行うのである。

これらの勸進上人は、僧であり、同時に貿易商人であり、同時に資本家であり、同時に事業家であるといえる。

つまり、倭寇も勸進上人も、どの身分にも属さない境界人(マージナル・マン)といえる。さらに、統一権力が出現する以前の南蛮貿易は、東アジア世界を往来し、中継貿易によって利をあげていたポルトガルやスペインと戦国大名や商人との間の貿易と考えることができる。

以上のことから、13世紀から16世紀にかけての交流は、

地理的・身分的境界に生きる民衆(a)が、相互に貿易を通じた経済的価値を求めて(b)、海を通じて交易や略奪を行い(c)、相互の国家の政治・経済に大きな影響を与えた(d)

と解釈できる。

よって、このような交流が行われた時期を、「境界人通交の時代」と定義する。

IV. 授業構成の一試案

①「交流史」学習の大目標

以上の研究を教材化するにあたって、次の3つの視点を設定した。

1. 海が存在を、国と国とを隔てる壁としてではなく、国と国(人間と人間)を結びつける道としてとらえることができるようにする。
2. 東アジア世界の動きの中で日本の歴史の推移をとらえることができるようにする。
3. さまざまな史料を自ら合理的に解釈することを通じて、新しい日本の歴史像を創造できるようにする。

1に関しては、日本が島国であることが諸外国との交流に大きな壁となっていたかのような解釈、また、農業の進展が日本の歴史の発展に大きな影響を与えていたこと、などの一面的な歴史解釈を乗り越え、生徒に多面的なものの見方を習得させることを目標とする。そして、日本が島国であるという地理的条件と歴史の推移の関連性や、農業以外の仕事に従事する人間が、

日本の政治・社会・文化の発展にどのように関わってきたのかを考察する。

2に関しては、1の視点を受けて、中国・朝鮮を中心とする諸王朝と日本が、為政者と民衆の各レベルで、海を通じてどのような交流をもったのか、そしてその歴史的意義はどのようなものだったのか、を考察する。

3に関しては、解釈による歴史像構築のため、さまざまな史料を駆使して、可能な限り論理の整合性を求める姿勢を養うことができるようにする。

以上の視点から、過去の人間の生き方に学び、広い視野で主体的に事象をとらえることができる能力を養うことができると考えられる。このことは生徒に、現代の情報化社会の中で、情報を主体的・能動的に取捨選択する力をつけることにつながると考える。

②単元構成と目標

単元「海を通じた東アジア交流史」

1. 日本の歴史と海の役割(1) (1時間)
2. 日本の歴史と海の役割(2) (1時間)

1では、日本国内や東アジア交流史において利用された海の役割を9世紀までの史料を用いて解釈・理解する。

目標1) 「日本」の国号と「天皇」の称号は、政治・文化の源としての中国を意識して成立し、8世紀頃までの為政者は、律令制度の導入などを通じて、社会改革を目標とする情報収集の1つの方法として海を利用していたことを理解する。

目標2) 交流の主体と内容からみると、紀元前後から8世紀までの時代を、「国王通交の時代」と解釈できることを理解する。

2では、日本国内や東アジア交流史において利用された海の役割を、16世紀までの史料を用いて解釈・理解する。

目標1) 9世紀から12世紀頃までは、東アジア情勢の変化を背景として、地理的境界人が国境と国の規制を破って交流し、日本の政治・経済に大きな影響を与えたことを理解する。

目標2) 13世紀から16世紀までは、地理的・身分的境界人が国境と国の規制を破って交流し、政治・経済のあり方を大きく規定しており、生きてゆくための情報収集の1つの方法として、海を利用していたことを理解する。

目標3) 交流の主体と内容からみると、9世紀から16世紀までを、「境界人通交の時代」と解釈できることを理解する。

時間	発問	教授学習活動	資料	習得させたい知識
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・現代の海難事故が減少しているのはなぜか ・では、船の安全な利用を通じた人やモノの交流は、東アジアの歴史の中でどのような役割を果たしたのだろうか ・日本と外国の間には、過去にどのような交流があったのだろうか 	<p>T. 発問する</p> <p>T. 発問する P. 答える</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・造船技術と航海術が飛躍的に発達したから ・海は、時として人間の意志や行動にとって壁となるが、物資の効率的な大量輸送という役割を通じて、海は政治的・経済的・文化的交流の場となった。 ・古代の遣使、遣隋使、遣唐使、白村江の戦い、日宋貿易、元寇、倭寇、ヨーロッパ人の渡来、朝鮮出兵、日明貿易(勘合貿易)、朝鮮通信使 など
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・日本は、いつ、誰が、なぜ「日本」という国号を使うことになったのか ・日本から中国への遣使はどのような意味があったか ・中国にとって日本からの遣使は、どのような意味があったか ・遣使による交流は、互いの国にとってどのような意味があったのか ・このような交流は、いつ頃、どのようにして衰退していったのか 	<p>T. 発問する P. 考える</p> <p>T. 発問する P. 答える</p> <p>T. 発問する T. 説明する</p> <p>T. 発問する P. 考える T. 説明する T. 発問する T. 説明する</p>	①	<ul style="list-style-type: none"> ・中国を中心とする冊封体制の中で、日本の為政者が、8世紀頃から、中国を意識して「日本」という国号を使い始めた ・律令制度をはじめとする文化や制度の摂取、外交を通じた国際的地位の向上、国家による貿易の独占を実現できた ・世界の中心であり、徳治主義をとる中国は、国威維持のために周辺諸国からの朝貢を積極的に受け入れた ・国家の支配層による、交通の独占に伴う知識・情報・貿易の独占を意味していた ・唐の弱体化と、摂関政治による政治の停滞によって、8世紀終わり頃には衰退していった
終結	<ul style="list-style-type: none"> ・8世紀以前の交流の特徴をまとめてみよう ○8世紀までの東アジアでは、誰が、どのように海を利用しようとしたといえるのだろうか 			<ul style="list-style-type: none"> ・8世紀以前、日本の為政者は、制度の発展と安定化のために、中国の為政者に公式の使者を遣わした ○為政者が、よりよい社会をつくるための情報収集の1つの方法として海を利用していた。 ●つまり、交流の主体と内容から考えて、紀元前後から8世紀までの時代を、「国王通交の時代」とよぶことができる。

<資料①> 略

<資料②-1>

…… 831年の官符(日本の朝廷の命令書) ……

愚かな人民が金に糸目を付けず、争って買い取る。外国の評判に目がくらんで、国内の器物をさげすむので、新羅人が太宰府に持ち込む貿易品については、府官(太宰府の役人)の立ち会いのもとに、公定価格で取り引きしなさい。

…… 円仁はどうやって帰国したか ……

天台宗の僧円仁は、838年、仏教を学ぶために遣唐使に同行して唐へ渡り、839年、新羅の商人船に乗せてもらって帰国した。

東アジア交流史における海的作用(2)

<資料②-2)>

1193年、朝廷からだされた官符……

宋朝の銭貨は、これから以降、永久に使用を停止する。銭貨の取引を停止しなければ、万物沽備法(朝廷が物価を公定する法律)を日本の市に定めている意味がない。よって、檢非違使と京職(平安京にある朝廷の官職)は、これから以降、この、銭貨の永久使用停止の命令に従いなさい。

1089年、宋の蘇轍の宋朝への報告……

北界には独自の貨幣がなく、公私の貿易にはすべて宋の銅銭を使っています。銭貨の国外持ち出しは厳重に禁じられています(五貫文以上持ち出した者は死刑)が、利のあるところとめがたい勢いです。宋では毎年百万の桁で銭を製造していますが、なお通貨量の不足に悩んでいます。その原因は、銭が四夷(宋を囲む国々)に散入してしまっていることです。

<資料③>

1401年、義満が明に出した国書……

日本の足利義満が、大明国の皇帝陛下に国書をさしあげます。日本は、国がはじまって以来、ずっとあいさつのための使いを使わさないことはございませんでした。今、私は、幸いにも、国政をつかさどっており、国内を平和に治めております。そこで、特に昔からのきまりに従って、商人肥富を、禪僧の祖阿に同行させ、貴国との親交を結ぶためにおみやげを献上いたします。…

1402年、明皇帝が義満に送った返書……

私が皇帝になって、多くの周囲の国々があいさつにやってきました。私はこれらの使いをすべて受け入れ、ここにおまえを日本国王源道義とし、明の王室に心を寄せて荒波の海を越えて来朝し、漂流民を返したことなどをほめたたえる。今、使者として道勢・一如を遣わし、民の暦を渡し、宗属国として認める。…

時間	発問	教授・学習活動	資料	習得させたい知識
導入	<ul style="list-style-type: none"> 9世紀以降の東アジアは、どのような状況だったのか 日本は、中国をどのように見ていたのか 	<ul style="list-style-type: none"> T. 発問する T. 説明する 		<ul style="list-style-type: none"> 唐の衰退と宋の成立、新羅の衰退と高麗の成立 中国から導入した律令制度が次第に緩み、地方政治の混乱の中で武士が生まれた 遣唐使の回数の減少(7Cは8回, 8Cは10回, 9世紀は2回, 最終838年)に見られるように、派遣の意味が薄れてきた
展開	<ul style="list-style-type: none"> 資料②の2つの資料からわかることは何だろうか 	<ul style="list-style-type: none"> T. 発問する P. 考える T. 説明する 	②	<ul style="list-style-type: none"> 9世紀ごろ、中国に新羅の商人がおり、その商人は日本へもやってきた(新羅の地方豪族張宝高の存在) 東アジアの交通関係は、国家間の外交によらない民間の商業活動に重心が移りはじめ、日本の商人と宋の商人の間の貿易(日宋貿易)が盛んになった 日宋貿易で輸入された宋銭は、日本で「銭の病」といわれたほどに普及し、商業を発展させた 日本の律令政府は、12世紀の官符で、宋銭の使用を永久に停止した 中国の宋王朝は、11世紀の命令で、宋銭の国外持ち出しを固く禁止している(その後の貨幣の使用は、ますます盛んになっていった) 宋銭は、国家の規制や国境を越えて普及した
	<ul style="list-style-type: none"> 日本に入ってきた海外の情報は、具体的に、日本の社会にどのような影響を与えたのだろうか 国家の境界と意思を超えた活動に対し、為政者はどう対応したのか 銭貨の使用停止や持ち出し禁止は効力があったか では、どのような人々が、国の規制や国境を越えたのだろうか 	<ul style="list-style-type: none"> T. 発問する P. 考える T. 説明する T. 発問する P. 考える T. 発問する P. 考える T. 説明する 	2)	<ul style="list-style-type: none"> 倭寇、貿易商人、海賊など(勤進上人の活躍のようす、海賊のルール、新安沈船) 地域的な境界人が「国家」の枠を打ち破っている 身分的な境界人が「国家」の枠を打ち破っている 足利義満は、倭寇の禁圧を名目として、勘合貿易の開始を明に要求し、朝貢貿易の形式で実利を得た 為政者は、実質的な貿易商人であった境界人の活動を利用して、幕府の財政を補おうとした 境界人の活動が、為政者が行う政治・経済のありかたを規定していたといえる
	<ul style="list-style-type: none"> 為政者は、境界人の活動にどう対応したのか 15世紀以降の境界人の活動は、国の政治とどう関連しているのか 	<ul style="list-style-type: none"> T. 発問する T. 説明する 	③	
終結	<ul style="list-style-type: none"> ◎では、16世紀までの日本は、誰が、どのように海を利用しようとしたといえるのだろうか 	<ul style="list-style-type: none"> T. 発問する P. 答える 		<ul style="list-style-type: none"> ◎境界人が、生きていくための情報収集の1つの方法として海を利用していた。 ●つまり、交流の主体と内容から考えて、9世紀から16世紀までの時代を、「境界人通交の時代」とよぶことができる。

IV. おわりに

以上のような研究を進めるにあたり、さまざまな問題点が浮かび上がった。

前近代という長い時代を、大胆に解釈しすぎたきらいがある可能性があること。その点から、今回提示した指導案が、知識の構造図はもとより、細案としてしか提示できなかったこと。また、他のテーマで学習する際、この授業で用いた史料のように、合理的解釈を可能にする史料を、何を基準として選び(選ばせ)、どのように提示するのかを考察し、具体的な授業の展開を構成する必要がある。近代以降の天皇制国家の歴史の背景にある、中国や朝鮮に対する蔑視と、日本の神国思想・民衆の国家意識との関連を明らかに必要があることなどである。歴史学習は、私たちがこれから未来に生きてゆくために

必要であることをふまえながら、より具体的な授業構成を通じて歴史の多面的な展開を生徒に学習させることができるように教材を開発してゆきたい。

参考文献

- 「日本通史」 岩波講座 1993~1999
- 「日本の社会史」 岩波書店 1986~88
- 「海と列島文化」 小学館 1990~93
- 村井章介「アジアの中の中世日本」校倉書房 1988
- 村井章介「中世日本の内と外」ちくまリマックス 1999
- 網野善彦「日本の歴史をよみなおす」筑摩書房 1991
- 網野善彦「続日本の歴史をよみなおす」筑摩書房1995